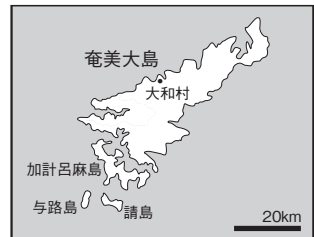


暮らしと観光を両立、 持続可能な集落づくりを

NPO法人 TAMASU 代表 中村 修



奄美大島：鹿児島県本土の南約380km、沖縄本島の北約300kmに位置する亜熱帯海洋性の島。大和村は奄美大島の中央部、東シナ海に面する人口1,486人（平成31年1月末日現在）の島内で一番小さな自治体。果樹栽培が盛んで、スモモの生産量は日本一を誇る。

自然とともに暮らす国直集落の人々

私の住む国直集落は、奄美大島中部の大和村にある、人口一〇人ほどの小さな集落だ。国立公園宮古崎や白砂の美しい国直海岸、アダン林やフクギ並木など豊かな自然に囲まれ、そこに住む「くんによりんちゅ（国直住民）」は、年中行事の九月九日（豊年祭）や奉納相撲などの独自の文化・芸能を育んできた。

国直海岸は古くから多くの観光客が訪れる海水浴場だったが、観光地でありながら私たちの暮らしと密接に関わってきた。目の前に広がるイノー（珊瑚礁に囲まれた浅瀬）は、生命のゆりかごと呼ばれ、海藻や魚介類など多様な水産物が生息し、住民は一年を通じてこの海を利用してきた。私自身も幼いころから父とともに漁に出て、漁場や漁法、海

の厳しさや楽しさを学んだ一人だ。

夕暮れ時の国直海岸は地域住民が集い、さながら社交場の賑わいを呈する。集落が茜色に染まる夏の夕暮れ、児童生徒に帰宅を促す集落放送とは裏腹に、人々は海岸へと降りてくる。子どもたちは波打ち際で遊び、老人たちは西の空を眺めて明日の天気占う。護岸に陣取る男たちは夕日を肴に酒を酌み交わす。いつもの顔ぶれと話題、代わり映えのしない光景こそ集落の人々の至福の時間だ。

そんな国直海岸には、夏にウミガメが訪れる。ウミガメは五月から八月の間、夜間に上陸し、砂の中に一回あたり一三〇個ほどの卵を産む。産み落とされた卵は二カ月もすると孵化し、子ガメは海へと旅立つ。海岸で練り広げられる生命のスペクタクルだ。この時期になると集落の人々は、海岸沿いの街灯に赤いカバーを装着する。白色系の光に敏



夕暮れ時のいつもの光景。

感に反応し、赤色系は認識できないというウミガメの習性を利用した、月明かりを頼りに海へと泳ぎだす子ガメを街灯や自販機などの灯りで刺激しないために地元で採っている対策である。

この赤色カバーを被せた街灯は薄暗く、住民にとっては不便だ。ハブの危険性もある。それにもかかわらず地域の人々がウミガメの保護に配慮しているのはなぜか。それはウミガメを単なる生物ではなく、暮らしに恵みをもたらす海のシンボルとして捉えているからだと思う。私たちは海からの恩恵を享受して生活している。ウミガメを守ることは海を、ひ

いては人間の暮らしを守ることにつながっていく。不便さを受け入れ、自然とともに暮らす国直集落の人々の気質がここにある。

集落の宝を「たます分け」する組織の設立

「たます分け」という言葉をご存知だろうか。狩猟や漁労において獲物を配分する際に用いる奄美大島の方言で、「利益の共有や均等配分」を意味する。島の人々は、互いに協力し合って得た獲物を神々に捧げて感謝し、初心者から熟練者まで分け隔てなく配分する。自分の取り分(どうだます)はもちろん、獵犬(犬だます)や漁船(舟だます)、さらには通りがかりの見物人(見だます)にまで分け前がおよぶこともある。この島人たちの寛容性は、自然の恵みは神からの贈り物であり、すべての人がその恩恵に預からなければならぬという世界観からきている。

私は、こういった「たます分け」の精神に学び、地域の宝をともに守り、分かち合いたいという思いから、二〇一五年に特定非営利活動法人TAMASU(以下、TAMASU)を設立した。

TAMASUが守るべき地域の宝とは「自然」「文化」「コミュニティ」であり、それを分かち合う対象は、地域住民はもとより、旅行者ほか奄美大島に関わるすべての人々だ。集落固有の自然や歴史、文化などの魅力を、地域ぐるみで伝えることで、その価値の理解が深まり「宝」の保全

につながると考えている。また、観光客に伝えることで、住民自身も自分たちの暮らしの価値を再認識できる。これが組み合わさることで、観光のオリジナリティーが高まるとともに、集落そのものの活性化につながっていく。

じつは、当初は株式会社を設立し、観光事業を展開しようと考えていた。しかし、事業を遂行するにあたって、利益を追求するだけでなく、地元住民と将来像を共有し地域一体となって行動したいと思い、組織の形態をNPO法人とした。今でこそ「着地型観光」という観光形態が一般的となったが、当時の私には観光に関する知識もなく、周辺に参考となるようなビジネスモデルも少なかったため、試行錯誤の連続だった。しかし、国直集落にある資源と、それらを守り伝えようとする住民の熱意がTAMASU設立の原動力となった。

住民と語り、一緒に作業を行なう体験ツアー

TAMASUの主な活動は、地域資源を活用した体験ツアーの開催である。「国直集落まるごと体験」と銘打ち、「海辺で楽しむ」「里山で楽しむ」「集落で楽しむ」「島料理を楽しむ」の四つのカテゴリ、合計四〇種類のツアーを提供している。どれも国直ならではの自然と文化をダイブに体験できる内容だ。イチ押しはアウトドアを楽しむながら地元住民と交流し、さらには海の幸を堪能できる「アオサvs海の幸ツアー」。このツアーを案内するのは、国直で生

まれ育った中マサさん(八〇歳)と盛山小代子さん(同)のお二人。奄美大島では海苔摘みは総じて女性の役目で、春先には岩場を歩くご婦人方を目にする。アオサ(ヒトエグサ)は、島のさまざまな料理に利用される食材で、子どもから大人までみんなの大好物である。

ツアーは、潮の干いた海岸の岩に生えたアオサを摘み採る作業から始まる。以前は、トコブシなどの貝殻でアオサを掻き採っていたが、昨今は手軽さから缶詰の蓋などを代用することが多い。摘んだアオサは流水にさらし、ていねいに砂やゴミを取り除いて二〜三日乾燥させる。これは根気のある単純作業だが、講師のオバ様たちの「昔はああった」「この食材はこうすると美味しい」など、た



「アオサvs海の幸ツアー」でアオサ料理に取り組む子どもたち。

行政からの
メッセージ

自然や風土に根づいた体験で人々を惹きつける

NPO法人TAMASU(たます)が活躍する大和村国直集落は、奄美大島の中西部に位置し、奄美市との境にある。白く眩しい砂浜には毎年多くの海水浴客が訪れているが、同地区にある宮古崎が昨年の大河ドラマ「西郷どん」の撮影地となり、その美しい景色が話題を呼び、さらなる注目を集めている。

2015年3月に設立されたTAMASUは、先人たちから受け継いだ自然や文化、コミュニティーといった奄美の宝を守り伝え、奄美に関わるすべての人々がその恩恵を享受できる環境づくりのために活動している。「たます」とは奄美大島に伝わる方言で「利益の共有と均等配分」を意味し、団体の理念を表している。

代表の中村修さんは、じつは元大和村役場職員。私とは同期であり、退職時と同じ課に所属していた。彼から観光事業を起こすために退職することを聞いた時は耳を疑った。最近では、奄美でも体験型観光を行う団体が設立されてきているが、当時は聞いたこともなかったからである。しかし、国直集落の多くの方々が中村さんの熱い想いに共感し、団体の活動に協力した結果、多くの観光客の呼び込みに結びついたことが、彼の進んだ道が間違いでなかったことを証明している。

景色を眺めるだけの観光は一過性になりがちだが、自然や地域風土に根づいた文化を体感できる体験型観光は、あたかも自分がそこで生活していたような、どこか懐かしい感覚を覚える。これが多くのリピーターの創出につながっている。自然とともに営む生活文化が高く評価され、環境文化型の国立公園に指定されている奄美ならではの観光スタイルなのだろう。

中村さんは、「自分一人では決して活動できない。まわりの方々の協力があってこそだ」と話す。国直集落では、砂浜に産卵が上がってくるウミガメ保護と、孵化した子ガメの迷走を防ぐために海岸近くの外灯を赤いセロファンで覆っている。こうすると光量が落ちるため住民には不便だが、しっかりと地域の理解を得ながら自然保護や景観保全が進められている。観光客の皆さんは、地元の方々との交流を通してこうした集落一体となった活動を理解するとともに、奄美らしい観光を満喫しているようだ。

このような取り組みが、ほかの集落にも普及していくことを望んでいるが、まずはリーダーシップを持った人材育成が必要だと感じている。行政としても精力的な活動を行っているTAMASUをバックアップしていきたい。

(大和村企画観光課長 森永 学)

わいもない会話や昔話がそれを忘れさせてくれる。このツアーの一番の楽しみは調理&試食タイムだ。アオサは天婦羅やかき揚げなどのメイン食材としても美味し

が、風味づけなど他の食材とのコラボレーションも格別である。ただし「アオサvs海の幸」と銘打っているだけに、アオサと海の食材を戦わせることにツアーの醍醐味がある。

磯の風味が香ばしい「カメノテ潮汁^{うしじり}」や真っ黒なイカ墨が印象的な「マダ汁」、海の王様イセエビがまるごと入った「エビ汁」といった「強敵」を前に、毎回、参加者たちはアオサの活用法や食材との相性を確かめ（味わい）ながら「格闘」している。

そのほかのツアーでも、漁師や農家、鳥唄などの伝統芸能技術者といった多士済々の地域住民に案内を依頼している。ツアーを企画する際は、プログラムを先につくるのではなく、まずさまざまな技能を持った人材を掘り起こし、その方にスポットを当てた体験メニューを造成するように心掛けている。あくまで地域住民が主人公だ。旅行者は、講師と交流を深めることで、フィールドとしての国直集落とそこに暮らす人々の魅力をまるごと体験できる。

来訪者に島の暮らしを伝えたい、という思いからスタートした体験ツアーであったが、むしろお客様から島の価値に気づかされる機会も多くあった。「教えているつもりが教えられている」とは、ツアーを重ねる中で幾度となく実感したことだ。

住民生活に配慮した集落観光のルールづくり

奄美大島の観光入込客数は、二〇一五年のLCC（格安航空会社）の就航を機に増加傾向にある。今後も「奄美・沖繩」の世界自然遺産登録が進められるなど、好況が見込まれる。実際、TAMASUの設立当初の受け入れ人数は

二二〇人だったが、今年度は一〇月末現在ですでに六三五人と、大幅に増加している。

一方で、観光客の増加にともなう地域への悪影響の懸念も生じている。今年度、私たちが行なった観光に関する住民アンケートによると、地域住民の五二パーセントが「観光客の増加により何らかの不快な経験をしたことがある」と答えている。

主な事案として「ゴミの放置」や「打ち上げ花火など夜間の騒音」「車両荒らしや盗難事件の発生」「集落内の車両通行量の増加」などがあげられた。これらは決して看過することのできない観光公害であり、今後、組織として取り組むべき重要課題だと認識している。例えば、住民生活の不安を払拭するには、観光客の集落内行動を規制する何らかのローカルルールが必要だろう。そのためにはアンケート調査やワークシoppなどを通じて、具体的な対処方法をとりとめていかなければならない。ローカルルールは、単に観光を規制するのではなく、住民も許容できる範



2018年12月に行なったワークショップの様様。

囲でお客様を迎え入れる意識を持つことで、持続可能な観光振興につながる内容にしたいと考えている。

昨年一二月に行なったワークショップでは「毎月第三日曜日を集落清掃の日とする」「集落内の車両制限速度は時速二〇キロ以下」など具体的な案が提唱された。これらは法的な拘束力こそ持たないが、課題解決に向けて住民自らが意見を出し合ったプロセスは意義深いものだった。今後はアンケート調査結果やバブリックコメントを添え、TAMASUから国直集落に対しローカルルールを提言していきたい。

若者戻りやお年寄りが住み続けられる集落に

住民アンケートでは「国直集落において観光の振興は重要だと思うか」という質問に対し、七割の住民が「そう思う・やや思う」と回答した。さらに「観光客が増加することについてどう思うか」という問いには、八〇パーセントの方が「歓迎する・どちらかといえば歓迎する」と答えた。この結果からも住民は、来訪者増に対する不安を感じつつも、観光の振興そのものは肯定的に捉えていることがみえる。

しかし、「私たちは静かな環境が好きで国直に移住してきた。観光客が増えることによって周囲が騒がしくなることは望まない」という意見も寄せられた。集落内で観光に携わる者はごくわずかで、多くの住民はその恩恵を受けない。見方によっては、観光客は迷惑な存在とも映るのだ。

国直集落の景観は、そこに暮らす人々の営みの中で培われたものである。事業者たる私たちは「観光は地域づくりの手段であり、目的ではない」という点を肝に銘じている。

TAMASUが思い描く国直の将来像は、「若者が戻りたいと思える地域」「お年寄りがいつまでも住み続けたいと思える地域」だ。島の子どもたちは、高校を卒業すると進学や就職のため、その多くが島を離れてしまう。彼らが島に誇りと愛着を持ち、「島に帰りたい」と思った時に、それを受け入れることができる地域でありたい。

これまでのTAMASUの取り組みが交流人口の拡大や住民所得の向上、雇用の創出につながりつつある手ごたえは感じている。しかし、たとえ経済活動が活発になっても、昔ながらのコミュニティを大切に、島人同士が支え合って暮らすことのできる地域でありたい。私たちが目指すのは、地域資源を活かしつつ住民生活に配慮した持続可能な集落づくりである。



中村 修 (なかむら おさむ)

1968年、奄美大島国直集落生まれ。特定非営利活動法人大和村役場TAMASU代表。大和村役場を退職し2015年に同法人を設立。地域資源の活用と住民環境に配慮した観光の振興により持続可能な集落づくりに取り組む。